

織物文化【織物の歴史】

十日町（とおかまち）は長年、越後縮（えちごぢぢみ）の生産と流通の中心地となってきた。この伝統的な織物はラミーという糸で織られている。ラミーとは、近くにある信濃川（しなのがわ）の湿原で豊富に育つかラムシという植物の皮から抽出した靱皮繊維のことである。この地域でラミー織りが行われていた最も古い証拠は縄文時代（紀元前 14,000～350 年）にまで遡る。

現在の十日町市博物館周辺の大規模な集落で最初に縮織りの方法が知られたのは、古墳時代（CE 25～552 CE）から平安時代（794～1185）の間である。夏の間は農業で忙しかったが、冬になると女性が織機を持ち出したのである。江戸時代（1603～1867）には、越後縮は高品質の織物として全国的に知れ渡り、十日町は、将軍家の夏服用に作られた御召と呼ばれる撚りの強い糸織物で有名だった。江戸時代末までは植物繊維の糸が使われていたが、その頃には縮の需要は減少していた。十日町の織工は絹の使用を受け入れ、明治時代（1868～1912）とともにやって来た近代化の波に乗り、西洋からジャカード機など新しい織物製造技術が導入された。1950 年代には、布地の表面に直接絵を描くように色を付ける友禅染めの技法が織物生産に組み込まれ、その産業は現在も栄えている。